

隨泉寺寺報

平成 25 年（2013 年）1 月号 第 509 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺 御正忌報恩講法要（本願寺）

■ 隨泉寺の門信徒の皆さま、

新年明けまして、おめでとうございます。

いま、元日の早朝です。先ほど除夜の鐘つきが無事終了いたしました。山門のところから空を見上げると、西の空高く大きなお月さんが輝いています。



元日の広島は気温は零下 1℃、でも、その寒空に煌々と輝くお月さんに「今年は庫裏増改築もいよいよ完成、建物は整ったのでこれから住職としての仕事が重大！」と、凜とした心にさせられました。心新たに出来る元日と云う日を考え出したのは人類の知恵です。先人の知恵です。犬や猫には元日と云う意識は毛頭無いと思われませんが、先人達は どうして、いつ頃考え付いたのかとインターネットで調べますと、旧石器時代（1万3千～1万1千年前頃）のフランスの遺跡から、石器で月の満ち欠けの変化の様子を刻みこんだと思われる動物の骨が複数出土したそうなので、後期旧石器時代、約5万～約1万年前のいつかだと云う説が有力のようです。現代の私たちは当たり前のように元日と云う日を迎え、気持ちを新たに出来ることにより前進して行けるのですが、此処にもお蔭様があるのですね。今年も、隨泉寺を宜しくお願い申し上げます。

1月の法座予定

- 1月 9日～16日 …… 御正忌報恩講（本願寺）
- 1月 13日 …… 掃除 瀬野川団地・桑原
- 2月 2日午後6時より …… 門信徒会本部役員会

新年明けましておめでとうございます。

さて、去年は皆様にとってどのような年でありましたでしょうか？

私にとって去年の2012年は、若干32才であります。今まで以上に阿弥陀様と向き合った1年となったのではないかと自分では感じております。

去年の1月16日には親鸞聖人750回大遠忌法要が厳修されました。50年に1度の法要に私も本願寺職員の一員として御真影様のお近くで奉職させていただきました。法要中には全国のご門徒の方々と触れ合うことで、浄土真宗のみ教えが脈々と現代へと受け継がれてきたことを有難く感じました。そして門信徒の方々の手が合わりお念仏がこぼれている姿を拝見し、阿弥陀様のはたらきをこの目で見る事ができてとても有難い御縁に遇わせていただいたことと喜ばせていただきました。



また4月から9月までの約半年間は、本願寺伝道院において寮生活を送らせていただきました。たくさんの先生方との出会い、励ましあい語り合った友人たちとの日々、今まで以上に阿弥陀様と向き合い考えることのできた、掛けがえのない時間を過ごさせていただきました。

そして、10月からはここ広島での生活が始まりました。右の左もわからない私に、住職や坊主、若坊主、ご門徒の皆様を支えられながらの生活でありました。

今まで本願寺の職員としての全国の門信徒の方々と出会わせていただきましたが、それは本願寺の一職員としての触れ合いでありました。ですので私にとっては、隨泉寺での法務が初めての現場でありました。

門信徒の皆様にとっても温かく迎えられ有難い励ましのお言葉をいただき、そしてお念仏を喜ばれている姿を真近で拝見させていただき、浄土真宗のみ教えを大事にされてきた安芸の地へと来ることができて本当に良かったと感じさせていただきました。

今年は私にとってどのような年になるのか、まだお会いしていない沢山の門信徒の方々と触れ合うことが楽しみであります。そして、今年は私にとって、とても嬉しい1年になるに違いないと思います。今月中に家族が増える予定であります。新しい命と出会えること、そしてお念仏を喜ぶ家族が増える事がとても待ち遠しい気持ちです。

今年は昨年以上に阿弥陀様との仏縁を喜び、仏恩に感謝し、聞法の日々を過ごさせていただきたいと思っております。また浄土真宗のみ教えがますます広がりますよう、隨泉寺の護寺発展に門信徒の皆様と共に精一杯尽くして参りたいと思っております。まだまだ未熟な私ではありますが、本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

平成 25 年 1 月

若院 釋智哉

母を送って

自分が病院での闘病生活の中、覚悟する時間があったとはいえ、10月が母の大切な月になりますと医師から病状を告げられ、私自身がICUの治療を受けなくてはならなくなるとは・・・。

意識が薄れる中、4日後に目覚めたとき、母さん、頑張っているとわかって安堵しました。私自身母より早く逝くような親不孝だけは避けられ10月に退院。母の元へ意識のある最後の日に一緒に食事が出来。翌日から母の体調変化でその日が近いことを医師から伝えられ、私自身の体調の悪さを感じながら頑張ったが、私自身どうにも出来ない状態で再入院。病室から“母さん頑張って”と願い10月31日その日を迎えました。夜中携帯電話を母の耳元にあてたから言葉をかけて家族の声。私自身やっと言えた言葉“お母さんありがとう”ただそれしか言えませんでした。最後になって母に何もしてあげられなかった事が悲しいです。妻や妹夫婦が喪主不在の式を進め、義母その他の人にいい式だったよと後日告げられありがたく思っています。

“本当に母さんありがとう”を送ります。

H24年 奥田 博

法名 釋浄浪 俗名 奥田 浪子 平成24年10月31日往生 行年87歳

☆勘三郎の葬式

12月5日に57歳で亡くなった歌舞伎俳優、中村勘三郎さんの本葬が27日正午、東京都中央区の築地本願寺で営まれ、関係者、ファンら約1万2000人が参列し、逸材の早すぎる死に涙しました。弔辞では歌舞伎俳優の坂東三津五郎さんは「今でも目をつぶれば、横で踊っている君の息遣い、躍動する体がよみがえってくる。本当に



さびしい」と述べ、劇作家の野田秀樹さんは「君とは親友で、盟友で、戦友でした」と語り、坂田藤十郎さん、片岡仁左衛門さん、大竹しのぶさんらも故人の舞台と人柄を、それぞれにたたえました。最後のあいさつで長男勘九郎さんは「こんなに愛された人の息子に生まれて幸せでした。」とあいさつしました。とてもいいお葬式で感動しました。沢山の人が参ったからいいのではありません。大げさな立派なお葬式がいいのでもありません。花輪が沢山並んだのでもいいのでもありません。

縁のある人々のれ じつは 縁のある人がそれぞれ思いをこめて最後のおれをする。勘三郎さんの遺骨と遺族を乗せた車は、この日、「平成中村座」ゆかりの地の浅草・隅田公園で、思い出多い御輿まで担いで沢山のファンに見送られ、松竹本社、新橋演舞場、歌舞伎座に立ち寄ってから本願寺入り。喪主の長男・勘九郎が遺骨を抱き、次男・七之助らが会場に続きました。

みんな「勘三郎」さん 葬式は決して遺族のためにだけ行うのではありません。このごろ家族葬といって、肉親だけでお葬式をするというのが、多くなりました。しかし、なくなられた人は家族だけお世話になったのではありません。生前ご縁のあった人々が、お礼を言ったり、ごめんねと詫言を言ったり、最後のおれをする大切な場です。そして亡くなられた人は勘三郎さんに決して劣らない、その人なりの人生を力いっぱい生き抜かれたのです。いわば、みんな「勘三郎」さんです。家族だけでそっと送りたいというのにも判らないではありませんが、まるで他の人に知られないように隠すようなことは間違いです。



亡き人を偲ぶとき 私たちはその人の死ではなく、その人の生きてありさまを偲ぶのです。すでにその人がいなくなってしまったことを、いくら嘆いてみても何も生まれません。その人と共に生きることができた事実を大切にしてくほかはありません。節目ごとに法要

をいとなむ際も、あらためてその人が生きてきた事実をふりかえって、今の自分のいのちとのつながり確かめ、一步一步を生きることの重さに思いを致したいものです。

遺族への励まし 先年亡くなった父の葬儀に参列して下さった予想外の方々に対して、ほんとうにうれしくあり難く思ったものです。失った父の存在の大きさを知らされたと同時に、父が、いかに多くの人達の愛情と支えの中で生きていたかを思い知らされたことでした。お参りにはみえなかった膨大な数の方々一人ひとりの恩情に思いをいたさずにおれませんでした。父の後を生きるわたくしに、大きな励ましと力づけを与えた葬儀であったと思い起こします。

死を悼む姿の尊厳 人の死を悼み、悲しむ姿にこそ人間の尊厳を強く感じます。驚いたのはテレビのドキュメンタリー番組で見た象のすがたです。いわゆる象の墓場をりかかった象の一群の様子は、それまでとは明らかに異なった厳粛さで哀愁の感情を示します。中の一頭はある遺骨に対し、それが肉親のものか知ってか、立ち止まって愁嘆のしぐさを表します。ああ、象にもわかるのかと感慨を抱きました。いのちの尊厳を垣間見た思いです。全ての生き物を「有情」と呼んできた仏教の伝統の意味する所をあらためて考えさせられたことです。

野田さんの弔辞 葬儀での野田さんの弔辞の全文が産経のWEBニュースに掲載されていまして、以下に引用しておきます。一弔辞一部一

見てごらん。君の目の前にいる人たちを。列をなし、君におれを言いに来てくれている人たちを。君はこれほど多くの人に愛されていた。そして今日、これほど多くの人を残して、さっさと去ってしまう。残された僕たちは、これから長い時間をかけて、君の死を、中村勘三郎の死を、超えていかなくてははいけない。いつだってそうだ。生き残った者は、死者を超えていく。そのことで生き続ける。分かっている。けれども今の僕にそれができるだろうか。

